成形圖說

五穀部

二十

共林本

特別
二
144
19

門=加 1
雜 144
巻 2-019

成形圖說卷之二十

目錄

穆
稗
胡麻
薏苡
甘藷

成形圖說卷之二十

五穀部 穆類

比延 古事記○書紀等並ミ稗字ヲ塡ム凡上世ハ類ヲ以テ物ヲ命ス故ミ稗ハ品家ナリ猶秫ヲ糯米ヲ又ツテ糯粟ヲ

ヒエ

眞穆 穆ハ稗ヲ對ヒイフ○凡俗ヲ正眞ヲ物ヲ穆ト

まとあり ハ本の字ヲ以テ穆ハ麻ヲ面ヲ美眞ヲ穆ハ

心ヲ感称の眞あるヲいフ

穆子 救荒本艸 龍爪粟 鴨爪稗 以上正字通 鴨脚稗 食物本艸

蕃名

此ヲの水陸ノ二種ノ中ニ卑溼ヲ水ヒエ穆ヲ

ヲ修ヲ万葉ヲヲヲヲ稗苅ノえヲおくこ

えられしゆゑを我ひらめる即このものなり○信濃
岩村田ハ國乃高原まて六月麦を刈あゝ七月種る稲穂
我出たるいつゝと間をなく秋霜に傷まて穎実を結ひ
ずゝきあゝあり故ゆ水穄を以まり按ゆ救荒本艸穄子
生水田中及下湿地内苗葉似稲但差短稍頭結穂彷彿稗
子穂其子如黍粒大茶褐色味甘採子搗米煮粥或磨作麺
蒸食亦可是乃穄乃○陸穄ハ山野ゆ樹木を燎夷て生
木灰を肥として此の種を播ゆ字鏡ゆ所謂不耕而種
と焼蒔とも荒蒔とも云即是乃日向諸縣郡以北肥後
五家の荘まて八連山波濤のごとく絶陰狭隘ゆく

稲田を佃ずくり山民時伐うゞい叢林を伐火を放て
焼灰とするを法則乃稗子を播植こゝを收く周歳の饔
飧を供ふ俗字て赤墻稗と云凡山伐の山林を入て林を
笠葉とハ蒲葵より蒲葵乃葉管を似るとゝもて蓑笠を
はさげ笠と名くゝ而して稗子の葉に蓑を似るゆゑ
子と古婆比延按ふ宋張淏雲谷雜紀云沅湘間多山農家
と呼ていつゝ
惟植粟且多在岡阜毎欲布種時則先伐其林木縱火焚之
俟其成灰即種于其間如是則所收必倍蓋史所謂刀耕火
種也寒鄉瘠土の地人智乃施ふ所和漢一轍ふ出るゞ
だらし而ふ今日都會城市の者帛を衣稲を食い春秋の
交日乃蚤莫を視て天年幾度ゝの生艱難と為遂乃お

成形圖說卷之二十

四

れしかゝげる窮民の告ぐき者比々ゝ多ゝの○秋稗ハ芒
多く猪鹿猴を食ぶ故ふ山農好て之を種ゝ○凡稗稈
ハ宗歳年蓄積ても蛀の患なき良穀也後貫行曰相州足
柄郡嶺村の者田所を記す物の風土ふ稗を麦跡ふ植
るふ麦を刈おゝれて株ゞくし其中稗乃苗姉ゞゝ節
立てハ株ゝれゞ今二日三日節ゝゝ毋やうみとおゝ
ぶゞ長かゝゝる苗ゝれゞ延るふ株ひ節ゝくゝゝ苗
とうしなふゝと年くゝて囲みを成者ゝ〳〵ゝるハ
赤茎ゝとに麻茎に濡さゝ翌日ふ照されて立のぶるを
のゝれバ晨ふ露を拂ゝ茎ゝゞゝて長ゝ出るゞしゝい

ひしらげたる二三日ゲ曽野雷とバもゝひ出うげ果て
茎長ど節立ざりき是ものゝ物よんと用ゐしため
まてゝれゝまゝとゆ穂をとて拔らゝ女中
ゝ服飾られゝるゝぎ北といひあつり○延喜民部式曰
稗子尾張國五石又武蔵風土記赤坂荘貢麦稗等ゝ
即稌子ふして貢の負數と定ゝ
野稗
狗稗並稌子ゝ似て茎ゝの
稗音敗○和名鈔引左傳ゝ同ゝ名
早稗救荒本艸○蓋水稌ゝ對ての名ゝ

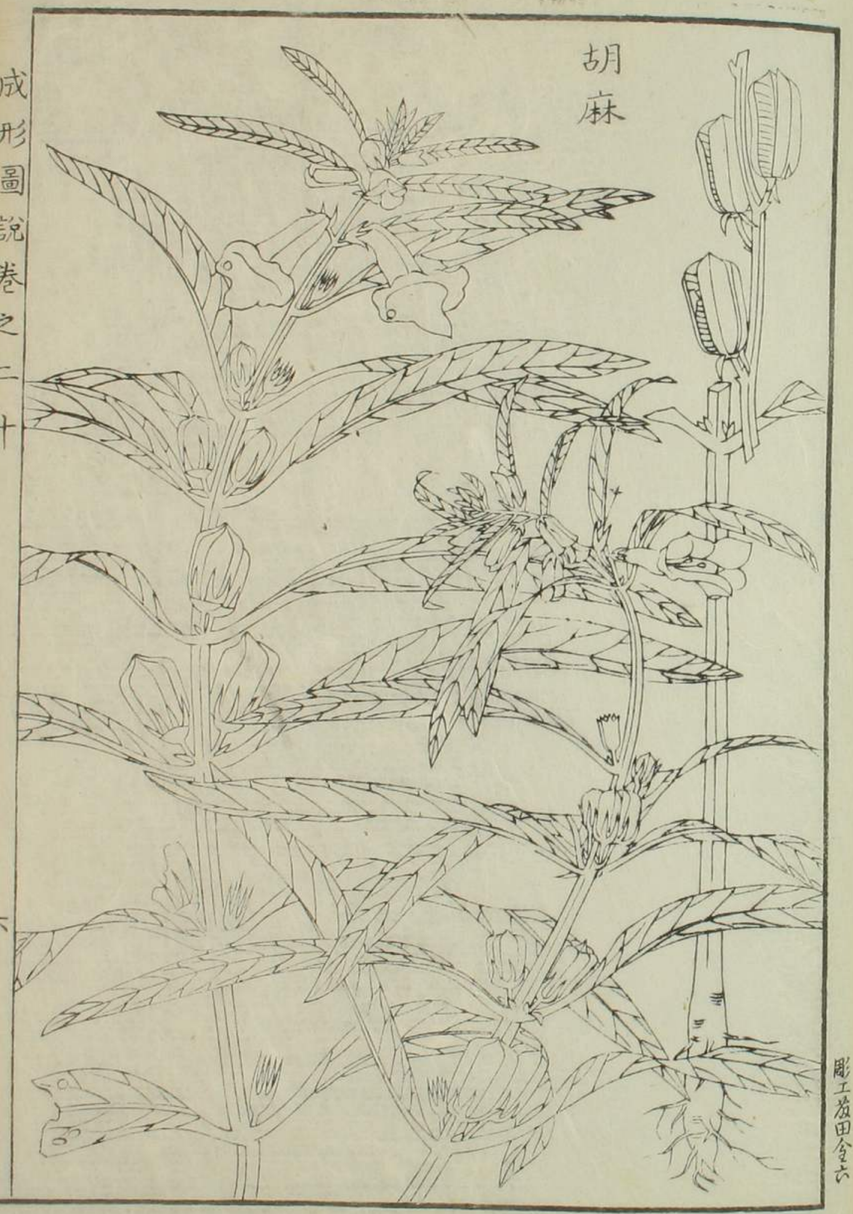
番名ハアフル
黒稗艸稗並ゝ狀ゝ就て名ゝ崔乃粟ハ多識編
稃ゝ芙以上爾雅
禾烏禾細目○蔵器云稗有二種一種黄白色也一種甚黒色仮芒有毛北人呼為烏

番名
稌子と稗稃ゝの形狀をいへバ稌子ハ苗莖稲ゝ似て子
實大ゝ稗稃ハ苗莖粟ゝ類て短く子粒と亦小也是
て濃ふゝし救荒本艸云稗有二種水稗生水田邊旱稗生
田野中稍頭出匝穂結子如黍粒大採子搗米煮粥食蒸食
尤佳或磨作麺食皆可拔ゝ野稗黒稗ハ今ゝ自然ゝ

物あり地稗ハ即旱稗ふ〜て大稗也黒稗ハ即烏禾ふ〜
ゝ稗ちゝと識ゞし爾雅翼云稗遇水旱無不熟而五穀則
有熟不熟之時以此不熟方之於稗則為不如耳凡民力の
限閑曠の地あらバ移稗皆蒔ゆゝゞ不圃をゑ旱乃
災傷ゆ足穀実の不熟ゑ遇て五穀ヒ救ふ為ぬ〜し

伊曾仁 即胡麻也蓋古名
宇呉麻 和名鈔引本艸注音五馬訛云宇古末按ゑ胡と濁
ゝと云未考得ゞ
ある類あり又胡麻唐音ウーと云ハ郡名考ゑ上野國多胡郡の胡音如呉と
音ふて此間ゑ元らの有来る胡麻のおゑ舶来の種を
指して宇古麻といひ後ハ音便ゑ
従て呉麻とのゝ呼ひしとハ不ゝ〜め

炒荏 胡麻の実
炒ざれハ



彫工荻田全六

宣しらざるの妄言也

胡麻 別錄○本艸より黑白を併入て一條とす清何鎮本艸必讀云胡麻之辨駮甚髮有以莖辨者有以葉辨者五符經云巨勝即胡麻而東坡與程正輔書云胡麻即是黑脂麻二說甚明不必再有別義也但近地者未必有如是之觝當以胡地者為勝耳近世以荒蔚子名小胡麻遂竟稱巨勝以訛傳訛不可勝言更有以黃麻子及大藜子誤之又誤也陳嘉謨蒙筌又引出胡麻一條又云有黑白二種其能亦延年補髓益氣長肌補虛休糧豈非重出乎蓋白者名油麻黑者名胡麻黃者即壁蟲

巨勝 本經○李東垣食物本艸云胡麻即芝麻在胡地甚大入中國歲減小至今一名巨勝

交麻 拾遺

油麻 食療以脂麻

狗蝨 別錄

方莖 吳普

藤宏 廣雅

次髓 本艸匯

烏麻 千金方又云胡麻國而為鵝以烏者正

油麻 食療記

脂麻 衍義○本艸必讀載黑脂麻俗名

黑荏子 本艸鄉藥

芝麻 脂麻本艸食物李東垣

苦麻 養老壽親書

白麻 嘉祐本艸

油

子苗 救荒本艸

蕃名レイン サート

青蘘 本經葉名

麻黐 本艸莖名

霸王鞭 群芳譜生脂麻單條者

吳麻 てゝ名上ゼゝ八代式令の頃八支用ひられて奉膳ゝ供へき新撰字鏡ゝ青蘘は胡麻葉とゝ訓られ

いとゝ古く胡麻の名八頃の者ゝし今尚山野自生のもの

ゝて実を成せる後ゝ外域ゝら貢ゝるゞ子も大きく

巨勝ゝとゝ称ゝて且ゝ功能多の從ゝゝびて食

料ゝ用ひしゝや西土も如斯ゝ云ゝゝ素問經云麻

麦稷黍豆為五穀麻即今油麻中國有四稜六稜者張騫從

外國得八稜黑種故又曰胡麻是始ゝ麻ゝ者ゝゝし

と胡地より獲しゝ色黑く子太かりしゆゑに胡麻と名
付しなり天工開物云胡麻即脂麻相傳西漢始自大宛來
古者以麻為五穀之一若專以火麻當之義豈有當哉窃意
詩書五穀之麻或其種已滅或即穀粟之中別種而漸訛其
名歸皆未可知也ちなるゝ大和本艸ゝ上巻ゝ五穀の一
ゝ也し麻ハアサノミ也胡麻ゝいゝ胡麻ハ胡國
より來るゝなるに媚ゝる紀大麻の實ゝ穀ゝかして食
ふべきゝいゝゝゝ凡ゝの書中ゝ本邦從來所有の物ゝ
動をすれハ舶來の種ゝかせるもあれゝ考ゝまゝゝい
そ又本艸綱目穀部第一ゝ胡麻と載て稲のごときハ種

麦苦蕎麦の下條ゝ列ゝ序次の錯置や東壁の窓ざ
るゝいゝゝしそなく彼土いゝ一より稲種のよゝゝざ
いゝ因穀ゝゝゝ夫胡麻の食料ゝおける僅ゝ飣品煎
淪の用にるゝゝ他晨夕の糧とゝるものハ百ゝ一二も
なし況や苦蕎麦の輩ゝおてハ馬牛牝芻秣ゝゝゝ係ゝ
本艸何為ぞや之ゝ稲米の上ゝ秩しゝ胡麻ゝて五
穀の第一とゝハ猫身毒の牛糞と香氣の上等ゝ取る
ゝゝと彼土の太古民無粒食茹毛飲血ゝるゝゝ皇
國ゝハひゝゝ遂ゝかゝのごとゝ作ゝ言なし胡麻
と以て冠百穀ゝの説ハ經義用ゝゝゝゝゝ実

ハ過莽ゐゝぶや○胡麻ハ方莖長葉秋のはじめ白花と
開き実と結ぶ莢を油胡麻とつゝ又房ゑ二稜四稜六
稜八稜の異なりあり八稜のと俗ゑ車胡麻と唱つるを
他ハ土地の名に因れるも多し○種ゑ遅早の二あり早
ハ三月遅ハ四月種し皆苗穴早を畏るゝ故ゑ多くハ
粟と同く下て且その粟穰ゑ扶られ偃側ざるの謀をか
ゝり秋分頃ゑ実熟て刈時ハ粟とおなじ或ハ水田の畔
ゑ拓蒔て竟ゑ芸漑と施ざるもよく生茂り子を收ゑハ
一把つゝ束ね乾して房と打て擇ぶり○薬と餌ゑハ
黒と用ひ油と麻ハ白と佳とす圓白搾油の名あり六ハ

蒸炒ぜて麻をつゝ即香油ゑり薬ゑ入べしひゝハ今
の製附おし香油と玄及の液を塗り紙燈を烏く長くし
又光艶を生ずる○麻油ハ炒熟て熟うち油を壓出す本
州ゑ生油とゝゝり生ハ生酒ゑり四油ハ山城山崎の製を天
下の名物とす今ハ五畿諸州皆あり○麻油滓を稲餅畜
ゑ和ぜるを胡麻餅とす多く糝ゑ入て本州ゑ麻枯餅又
麻砧餅麻粕おどつゝハ此云胡麻油滓ゑり○瘍科の膏
薬を煉ハ皆香油ゑり○密教僧の護摩を修ゑハ又焚油
を用て火勢を助ずる○香油ハ燈とゝして冬を凝らぜ
氣味甘平無毒○胡麻を服ハ毒魚狗肉害菜を忌○海螺

田螺の殼ゑ胡麻を合食ハ肉膨脹ゆり又瘧後ゑ炒胡麻
を食すれハ再発し妊婦三月以前多食べゝ堕胎
し○主治五内虚補ふ氣力を益大小腸虚利し寒暑ゑ耐
風濕の氣を逐産後羸困を治し蒸食ハ風を生せゞ生ゑ
て嚼小兒頭瘡ゑ塗湯ゑ煎し悪瘡及婦人の陰瘡を浴を
れハよし○野葛の毒に中るゑハ野葛ハ山野ゑ在藤本ゆ多蔓の色赤
く節高く節の所毎ゑ葉三葉づゝ付て莖の葉のおとく
似て光ゆり節の所に花咲て細く莢ゆり莢を切
ハ汁いゞ人の目に附ハ體のぶれ痛痒を為急ゑ香油ゑ
に誤てこれを食へハ人を殺す犬毒の甚せ
人糞を和して飲ゆり廣惠濟急方○諸野菜の毒及草の毒に
中るに香油を多く飲べし又凡の中毒を通療に○疫

かて厥つゝ氣うすく身冷昏悶て人事省ざ汚ゑハ生清
油一盞を用て喉中ゑ注ハ須臾して風瘧を逐出て癒
得効方○乾霍亂吐ゞ下ざるを乾霍亂と名く香油ゑ茶椀まゞ一飲ハ吐
て後愈衛生場簡○蜘蛛咬ゑ烏麻油ゑ鉛粉を和泥のごとし
て塗ハ燥ハ復ぬるべし千金方○百虫耳ゑ入るゝ時口椀
牙言語を禁ぜゞ紙を以て耳の竅を塞虫入るゝ耳を空
蔴油を以て耳竅へ滴入れハ或出或死傷醫大全○巴豆の
毒を解ゑハ生油を飲又鰒鰊の毒解ゑハ麻油を以て灌
ハ毒物を吐出して瘥百一選方○銀杏の毒中ゑハ香油を飲
べし百病主治○飲食の毒ゑ鵬砂四兩真香一斤瓶の中ゑ浸

異種　薏苡

置蕓毒ヨ中〳〵時モ油を少許飲べし久き油と魚良と
以瑞竹堂方○男女共ヨ中年ヨ二毛生ハ黒麻油五合ヨ胡桃
仁油桃仁油雞子油各一合ヨ拌て南燭子百箇枸杞葉百
斤と同煎して磁器ヨ盛口封土ヨ埋おと百日許し
先白毛を拔て其痕ヨ油を毛孔ヨ傳ハ後ヨ生毛黑本朝食鑑

通須多麻古語拾遺○粒珠ちゐ粒ハ食ふ
べきの名ふ〳〵て形珠ヨ似〳〵り
玉通志新撰字鏡○通志
の志ハ須と通ふ
通志多麻和名鈔○今言珠粒
珠〳〵云ハ俗言ふ

唐麦　朝鮮麦以上の二ハ川穀に係る

薏苡　解蠡以上本艸○時珍云薏苡葉似蠡
實葉而解散又似芑黍之苗故名　芑實　贛

米以上別錄○陶氏作 簒珠雷氏作穢米 回々米 屋茨 綱目ニハ苗の名なし 艸

珠兒 西番蜀秫 贛々珠 菩提子 川穀 以上救荒本艸 薏

珠子 圖經 草曾目 穀耕錄 米仁 本艸逢原 薏米仁 品字箋 苡仁

遵生八牋 有乙梅 採取月令 玉珠附方 葡蘆 莖葉名○藥性纂要

蕃名シンテイヲビスタラアン

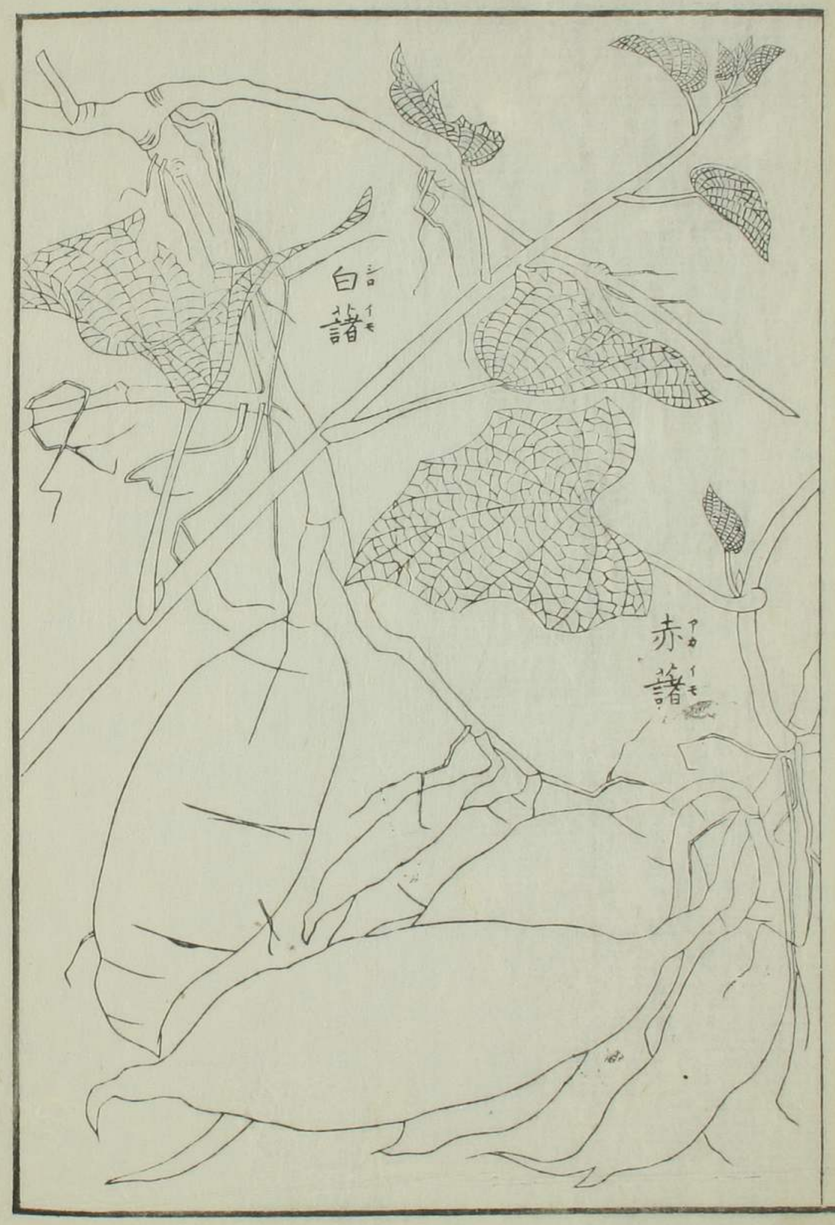
大のもの三種あり○一種ハ唐麥と云者で粒細く皮うすく粘て糯米乃如し年々春分乃頃種子を蒔く苗ハ丈ハ高三四尺五六月枝毎に莖ゞ抽て穗を出し實と結ぶ九月霜降て後刈取て實を取り干して貯ふ米とする又蒸乾し又雷盆杵ゝと臼にて磨けば白

米となるを粥となして食ふ性溫氣を好む嫩苗出る時摘て或ハ節を分て挿て繁しかゝれバ實少し凡宿根より出ハ歲堅く子少しあるよりゝ種子を下るもの出乃莖高きもの○一種宿根或ハ子義ておのれし春苗出るハ稈高ク五尺唐麥よりて葉大なり葉ゞ枝に出ハ赤色乃實と一粒つゝ結ぶ穗ゝ乃ばゝき莢花を垂て後絲二三條ゞ出て絲脫去て實熟す小兒華也實ゝ孔して線を貫し念珠とする中種ハ内の仁少しちゝまりと粥を煮ル為ゞ作るべし 按ニ此種を古人皆救荒本艸の川穀と云ハ誤ル 救荒の川穀と云ハ蕙苡なるべし○一種亦如れ〻宿根より

水堇諸

生て実充大き多く殼厚く脆き理あり て且実多く然
ども内乃仁ふきものなし 遇荒と炊食ふ多 塩づけのも
二は唯雄なるを仏らし 細目時珍云薏苡一種圓而殼厚
堅者即菩提子也其米少即粳糯也但可穿作念經數珠亦
呼為念珠又玉機真藏論云真心脉至堅而如循薏苡子累
累然と云とおの種即自然乃通志珠也○葉と米とまぜ
飯と和へ餌と作て換く料理方多し米とまぜ飯と調し
るハ芳香早稲と家ちがひ又荣城湘と呼ものゝ葉少許
加ひて香清く味遒なり天工開物云近代燕京則以薏苡
仁為君入麹造薏酒大和本艸曰溼と中て面と小瘡出
来薏苡仁と煎服すれは有効

度奴久和宇諸
二色諸


白諸
赤諸

唐芋（カライモ）是も俗の通称なり○加良とハ西土を指せる言なり書紀万葉等に漢と唐とを分ち又度く諸蕃の國と加良といつる韓域とのこと也あどなるハ誤なり

○此芋本艸綱目に出し農政全書に

つの此芋の本艸綱目に收ハ蔬部に收ハ葉滑菜の部に出し農政全書に

ハ蔬部に收ハ蓋是蹲鴟の輩ふしてを名ちへ唐芋と

呼ものゞ宜しく芋類に列ぬ爲き者そ然ども凡西南諸

國の地此芋ものゝ民間に利益ある故ども切と国うし迫

に玉黍薏苡の上に出られハ今之を五穀の部中に附入

して移條の卷末に編纂に閩書南産志琉球國誌畧等の

如き既に穀部に序らるゝ此国より南方暖土に於て稲米

と其德を酬ものゝ

琉球芋（ルキウイモ）筑紫中國等の俗目也○琉球とて八單伊毛とのみ

琉球芋（ルキウイモ）文字八既に源隆國の今昔物語に

見えたるとなり琉球を明の洪武中流求の字と今

ハ書しもの東國にもいとく書更しもどもみなり言なり

あるりて呼ものゝ○此

赤芋（ベニイモ）皮多く筋多し味も劣なり

條の呂目ハ後に具列次

なきものゝ蕃殖し易く塊

なく旦多くなれ汁少く肉脆く

ハ其利最あり

白芋（シロイモ）凡計此諸の皮淡紅にて木槿の

花乃色なるゆゑなり○波仁須（ハニス）此芋亦凡計

ならでも木槿色と称ふるの多し

て物因し波仁須赤木槿の花色と称る名なり葉にもぬ

に色乃変遷なきと何

須とるゝ今波武須と呼つゞ一説に蕃薯あ

るハ判事ふるの移書と

皮一重剥て後ハ

皮はれハ云赤芋なり

二色（ニイロ）此芋の半ハ淡紅半ハ茎白く味ハ淡し

半こはを味の最勝れ八里

て栗とるの隱語ふしに今里ふし

宇（ウ）此芋の色赤白く塊と

て甜美なるゝ故海見島にて甘藷と登武と呼べ

これなるゝ或ハ蟾蜍ともぶんくらうと

つるその塊ぶちしなる

人参芋（ニンジンイモ）去くてたし色ハ茎く味よし是本ハ二色

と同しふまて少変よりを目とあるてゝ也

山伏芋（ヤマブシイモ）尋麻芋共に葉の形と

甘藷（カンショ）本艸綱目 甘藷（カンショ）南方艸木状 番薯（バンショ）五雜組○大和本艸に甘藷番薯と二物とふした

まど誤まりて此種のいまゞ唐山よりきゝ呵ハ甘藷と云
廣志綱目等是なり明末より初て閩中より種ゝ出し後その
呂宋交趾より來るとゝ
南産志等並ま蕃の字加つぬ又金著傳習錄ま州木狀と
引て甘藷ハ即蕃藷也と
札ハ
諸稗史類編嶺外多藷間
有發深山邃谷而得者
三家著花樂考
廣故有之其一名番藷近年在海外得此種又云著蕷與山
藷顯是二種皆絶不相類又甘藷疏云閩廣
藷有二種一名山藷一名番藷為二種
ゝと藷ま二種あり山藷番藷ハ等の説ま由て農業全書
ハ甘藷即山藷とゝゝ
ゝ今乃此ま據て提出ス

番名

此ゝの吾　邦ま入ゝは既ま慶元の頃ゝひ呂宋等の

紅山藥　農政全書
朱著　閩書南産志
番藷　朱藷　以上羣芳譜
玉枕
金著　紅著　地瓜　以上金著傳習錄

諸蕃より吾藩ハ唐湊ま即坊津ゝ立市ゝ呵齎し來しゆゝ
ゝ伝ゝゝ初吾藩の僧文之ゝ著ゝる南浦文集呂宋國
ま贈ま書牘の中に彼國の商船贈信交易ゝ
詳ま載ゝ當時ゝ番船吾　邦ま入貢ゝハ多く川邊
郡坊津ま輻輳ゝゝ
中の唐芋とゝゝ我俗海外の地とゝゝ
良ゝ
ハ元禄中ま撰ゝ
ゝ稱ゝと記ゝ是ま元禄ゝ
うゝ如ゝ

成形圖說卷之二十　十六

西土へ渡り来り福建より持帰て種蒔めしより年後
元禄十一年戊寅の歳中山王より甘藷一籠と藩の大夫
種子島久基へ贈り来り久基家室老西村孫右衛門命して久基の
家臣邑慰毛那種子島石寺師に植しめしに生
家乗に載せらるき按に儀間親雲上の初年とおもはれ
る池城親方の元禄の初つかたなりしのか
所なるべしして國王まうでの時なれば
後を尋ぬるに今ぞまことのかしら
独儀間をこの頃ぞ清に入渡り
甘藷を種ゑ始めしより
やしうとなるべし今も沖縄
の沖縄お嶽のうちのあれば
別りつと称して御みあれ
の祭見るにおもひて
ぬなりしは今に一
ぬ渡り来しなるは

あらそて伝へ弘めしより琉球芋と名を負せるなり
し和漢三才圖會曰甘藷ハ琉球國多有之薩州及肥州長
崎亦多種之と載て本外國より舶傳せしなるべしいまだ
るを按ず甘藷ハ明の李時珍の綱目と著るの時までハ
いまだ唐山にもなかりき故ず異物志艸木狀を引て出
交廣南方珠崖之不業耕者惟種芋魏の説ありて現ず是
いらいいまだ本綱成て後十六年みて明の萬曆廿
二年甲午のとし閩人陳經倫なるもの其父振龍嘗て呂
宋國ず商ひせしず朱藷の多きを見て陰買して持帰り
及び其種法を伝へ来りと時の巡撫金學曾なるもの者

ず献上初て閩中ず種殖めて大ず歳荒を救ひ志ある民
其利と德とを以て金薯と名づけ蕃國より海を渡りて蕃薯
と称せりなり是　本邦みてハ　後陽成天皇の文
禄三年ず當る其年を後百六十年ばかりを経て清の乾隆廿年
乙亥の頃乾隆廿年ハ斯方経倫五世の孫陳世元其男雲
相次て郭縣膠青豫等の州に種しより漸く東浙の地ず
移し伝る其始末ハ金薯傳習録ず詳ず見されバ
西土へ流傳せしハ其近し○享保十七年壬子の歳海内
大ず饑饉し諸州餓莩多しひとり本藩ハ甘藷と貯ふる
ず賴て之を救ひ志ること於是　命ありて

江戸へ上りられば安房上總等の地より種を蒔せ遣りあ
薩麻芋と唱へつるといつて青木敦書の著やわれよ
番薯は享保十九年養生所の壇地より試作られ其後東
の島々一波に傳りて貯やうのことなりしに薩麻芋の人跡に絶て行損と要くせ〳〵大小作と
智ることあり其後八丈島等は曙地なれば九月末甘藷
の蔓を採て岸陰に貯置春芽を出し茂と二四月に移
し植る塊の莖一貫目位の太さ成るを青島などは四時種續るなれば常今南の曙地より限る北
越の國まで盡く種子越冬の法を知る遠く植て早く

堪取り大なる民食の助成永金學曾ゝ海外新傳より東西
南北無地不宜なしを證しまた農政全書より窖
藏して種を留めて北京諸邊にも諸穀種を蓄しなりつて
此方豈種ぶらざる彩の國にむや大底西備諸邑下賤
の民より至て社會等の外手常此諸球を諸穀に雜へ
食して窮年饑歲にも必此に賴て命を繼食るものなり
し徒に海内に播布せば天下治ど飢民なる事なし
常に食ふものは壽百歲ふ利益八利十三勝ると
なり彼國の書は須美せりと西土産地乃地より
書あげるものく虛言なはあらざるあり○此諸春曙新

芽ハ殺次甚茎紫色ハ芽ハ漸く蔓ハ多し節節毎節地
ニ着テ根頻ハ生ずし地ニ近ハ葉ハ生ずして葉ハ戴葉
の葉ニ似て形ハ雪又三尖ハ濃ハ牛子葉ニ似て
ハ白ハ南方の暖地ニ多く秋淡紅花を開く夕萎ハ形ハ相
同じ根塊ハ浅し子母鈎連して五六相簇ハ甚く其塊ハ
紫赤色ニ多ふ子ハ小し赤色ハ深紅ハ中ハ浅紅ハ中ハ淡黄
ハ白ハ濃黄ハ白ハ淡黄ハ白の二色ハ多ハ中ハ色ハ多ハ
て也し本来甘鍛ハ甘て末ハ苦ハ細頻ハ中ハ肉の質理膩
潤ハ白て生色ハ白ハ黄ハ白の二ハ味ハ甘平無毒
生熟俱ニ食ス○蒔ハ種ハ法ハ習ハ等ハ詳ハ此

方ハ農業全書ニ委しく記ス也ハ試ハ
ふ事の熟せざハ多ハ凡此ハ二月ハ
ハ園圃中日ハ向ハ冥く南面の暖地ハ深く
耕し板藁ハ焼ハ馬糞ハ多ハ地ハ温ハ和ハ
して蒔畝ハ縦ハ稠くハ多ハ也又生ハ多ハ土ハ
加ハ也ハ白ハ初ハ土ハ露ハ冥しさて上ハ八腐ハ
ふ茅茎ハ焼ハ灰ハ多ハ三月ハ芽ハ蕾生し漸く蔓ハ
多ハ是ハ苗床ハ蔓一二尺ハ及ハ時ハ細雨中ハ
を面後ハ墨ハ多ハ日ハ毎ハ茅ハ鍬ハ引ハ耕し格ハ
一畝ハ畑ハ二尺ハ畑ハ間ハ地ハ横相距ハ七

八寸間ヨ種蒔し是をかぎうゑといふ苗床一歩ヨ潴堀四五斗ほうゑ一
だん苗まて二三畦ちゞめてかぎうゑたらほ一だん苗
ようゑ是ハ多き
やうなれ又孫ヨ出芽しをれを二だん苗三だん苗ゑ
四月初ゑ七月乃初まゑ植ゑ二三だんの苗と
稙るゑ紀ヲ一だん苗まて稙ゑし蔓ほ長ゆゑ是ほ
ゑゑゑ稙ゑゑ農業全書ゑる旱せゞゑほ深ぐゑゑ
いつぶゑ多く稙まゞ民力ゑ多ゑ雨ゑヨ種ヨ時
は伊勢の記日ヨ活ゞとゑなし如此種蒔して
夏の間ゑ其蔓乃節ゝ地ヨ着め根ヨ時ゝ葉ほ隙き蔓と
左右ヘ移し移ゑ根ハ根ヨ移ゑかいほ堀ほ大まして

且多しかくゑると蔓反ゑゝ其まゝ水ゝく溢蔓ゑあ
節ゝ地ヨ着て殖ほゞれゞ根ヨ堀少し初め種しゑほ
二三度ほ草ほ除き蔓ほ移ゑまゞゑゑほ深き畝ほ用
ゑゑほ絶てなし素度と冨民初苗ほ稙ゑ紀一株ヨ
風ほ塞くしゝ○今北陸の農家ハ甘藷の苗床をふさ
大ゑほ少しつゝ根ヨ移て稙れほ堀ほ
ゞ加乃耕ゑゝゑゑゝ畦筋ほ堀種一ッほ二三
小引鍬て蹲鴨ゑゑゑして土ほ掩ゑゑゑほ
ゑゑれどかくしゑんハ種堀ゑく費て工夫ほ拙ヨか
かりめほ必蔓稙ヨゑゝゑものなしゑれゞほ北越ハ
米粟粮戻して東陸ほものゑしく秋成の後ハ銭一百ほ

て米乃三升四升も買ふあれバ甘藷あんどけ盛立一
升漬く十錢乃右まるぐ〳〵ぶ氏ぶ地ぶ
おもはざるすけ実ま瑞穂乃邦乃ありがゝぶためし
外國乃地道と日ひ国ゝして活るまゝきまゝて○雨多
地やし又ゝ肥ゝたゝふ地ま種ゝバ蔓ゝ出して塊少し
成ま農政全書曰外滋藤蔓根不入土結卵無力又曰盡成
枝葉層疊其上徒多無益也宜剪去之猶中飼牛羊凡土
氣堅硬ま種ハ蔓出して根入ゝ能ゝ種るの地ゝ沙地
の柔なゝ新ひ良ゝ出ゝ志ゝ此地ゝ本藩及南島沖縄まて
ゝ彼所謂呂宋國のゝく野ま被ゝ山ま連ゝて少しの閑

地ゝの所ハ皆種ゝるゝ必ゝ地ゝ擇ゝ此ゝ地ゝ
起して九十月霜の一二度ゝ降りて蔓葉の凋ゝたゝふゝ
ゝ晴日の暖ゝ所ゝ選ゝ蔓ゝ切ゝ秋ゝ発
掘て根ゝ新ゝく採ゝ所ゝ座ゝ除き藁ゝ去て牧藏ゝ
所ゝ好ゝ根塊最充實して味ゝ美ゝ甚ゝ決して雪
雨の降ゝ日ゝ掘ゝ出ゝ塊必ゝ腐壞して久ゝ保ゝ
がゝし亦ゝ冬ゝ蔵ゝ中ゝ新ゝ七月の末ゝ種ゝ根塊漬
くゝ出ゝ味ゝ附ゝ出ゝバ掘ゝ塊ゝ切ゝ蕎麥ゝ種て二
月ゝ出ゝ芽ゝ利ゝ新ゝ獲ゝ新ゝ○又一法ゝ蔓ゝ一歩ゝ藩
塊ゝ二四十ゝ結ゝ種ゝ植ゝ芋蔓長ゝ六ゝ尺ゝ

繁茂するに梅雨の比一時に枯るゝ如き是なきまゝ畦
に接して一節づゝ埋てゝ土砂雪の種類多き事と長種
ながくなる
ものゝ又生蔓は二尺許に成て両頭とも土に埋こゝ
れば中皆の節より蔓は生し両端より堀と成るゆゑ又
八九寸一尺まきりて植るゝ所又南方の暖地は十月
の末根と根とを接く老茎は埋め置て来春に成て
芽を出すは分茎なれば植ばせるゝと早して
根は取るゝとよし又南国の地は厳寒と雪多ゆゑ
冬一とせ植てより三年の内は竜子なれて四時掘出し
堀の大なるとは根を揃て小なるは土砂雪の寒ゆ

是ゆゑ八蔓を引あげて堀と根と蔓端と地に挿
置ゆゑ〳〵て不動に成るとは此等いろ〳〵の種
法地道の宜敷八土宜の肥磽を従ひ人力の多少に任
せ工夫ありて変化するものなり○本綱に甘諸其根似芋亦有
巨魁大者如鵞卵小者如鷄鴨卵とあり然るに本藷の美
田に作る者八大者八種〳〵二尺五六寸周に成るもの有り
之を稙に重六斤或八七斤に成るもの有り
の一尺五六寸周乃ものハ膏腴の地にて生育なり
○藷堀及種子は霜ふと第一の法にて夫極寒の地に蓄
地にふかくのみ〳〵ふかくされば種の法と切ざ穫ハふ

李此種字紙畏濕と悪む所より初冬霜の志ぐく降ざる
以前より晴日の暖なる折柄を撰み堀を掘り
新石を速に食用ひし玉金の如くみ屋宇の庶下南向
の岡地に林藪の蔭なく北風の防ぎ沢濕気と少き地
に窖(あなぐら)を作り稲穀(ヒエ)粟(アワ)類と黄蕷堀と藷芋上るを見
新と雪に其上に土を高く封せ雨水の浸入ざる様
て乾むべし是今の種樹家諸花菓花を窖藏して於用花
を用ひしるもの此に所り蒸と称るなり
で何もの地に入れ種子と苗ざる蒸きたりて漸く春暖
に及んで徐窖中に埋置て自然に発芽を待て植く

芽を出し味を淡泊に変し食用に堪ずして
裏に浮く成るを中に浮窖中に掘出し爨烟の気にて
を食用ひし充金を以前庶の内平庶の
の上に風の通ふ様にして種蒔に及ぶ凍の患なく
まく温気と免れ夏に初秋にいたり新堀の熟するま
て窖に続く貯し唐山の書に輭草まて包を通風の所に
陰乾もの法にて徐々と或は氷凍の害に免れ冬を
窖中にて空と防き春を通風の所にて温気免れと良
し○此の如の貯用ふ種々俱に使ふ事まて笑へ
甘漿濃くして渇に堪し志ぐ種ぶと多く味を
浸成に深し或は腹痛の患

所以蒸し又は煨して食ふと第一世民習の食まを薯て
はをさを食ふ或は雜穀まぜ〳〵食ふ亦餅糕
とも云ふ亦切して日乾し炒て或は切り煮て
湯浸し食ふ澤あと黄澤球漉し所以ふと晒し乾
し所〳〵是球唐芋のかぬかるを用葛粉を同し小麦
麪條のトヨ諸粉と出せしハ皆此もの〳〵あるべき澤
を手ておとあし飡ふして食ふ一として葉擲ぐ〳〵
次又釀して燒酎と升もるの法あまるト民ハ此諸を釀し
燒酎球製して百日の蜡一日の澤を樂むよるる又雪霜
を蒸ふ〳〵壞爛しなまふ〳〵と行ふがもを葉屋〳〵次ふを

浸し水形ちれハ正味球所以〳〵唐芋のかぬかを成ふ亦葛粉
少同し○西土の書ヨ六益八利十三勝ちと〳〵説所以甘
薯の功能民人の治用是ヨ後世ハ今此ヨ澤しぬ金
薯傳習録附載清陳雲番薯療病六益其一曰痢疾下血球
治ちれる此薯球蒸し熟し芍藥煎湯ヨて頻〳〵嚼服を
或ハ薯粉球冬蜜ヨ調へ服して驗所以其二曰酒積熱瀉
とを治ちれる此薯球煨所以熟食を其三曰濕熱黄疸を治
ちふる此薯球用て煮食ふと知ハ其黄おのつから退
く其四曰遺精淋濁球治ちふる早晩ヨ少ふる此粉球用
ヨ調一盃して大ヨ奇功所以ちを五曰血虚經乱球治ちふ

まは此薯を用て饑饉頻る救し其脾を調へ養ひ脾をして健まして物を生化せしむる時は經脉自ら定まれば曰
小児痘疫或治を乞ふまは此薯最能潤燥ふるく陳旧なしし
仲を安し胃を養ふ故に常に服せしむるは脆弱化して
痘瘡なを免 今南方の人老幼共に何病の痛なくして食して
忌ことなし但此まして醸したる焼酎を強飲
をれは病を患ふもの○傳習録又附載清陳世元種薯八
なを必須慎まといふ
利 曰原野沙堤山坡海岸斥鹵墳埴何地にも宜しく
沒といふまふく各生成逐ふ皆收穫多し生利一地
凡百穀ふる旱潦雨暘の時若ふ何ぞて氣候延しなれ
ど種ふ生ずといふ也此薯を夏秋間さへ種

ぬまふ雨旱俱に損侵ふく風と蝗と害ふふこと能ふ
僅歲ふと收納ふし生ふ利二地地氣寒燠共に異なる夏種
く秋收し百日を計ふく功成ふ霜のふまず隕ふる実
既ふ登と凍の初ふ消ふる紀年便ち茹ふ生数し蒲盧ふ
早遲ふ生功ハ粒粟ふ多し共に三地法の耕作ふ苦勞
多しふいづれと薯を一ふび捕ふ自ふ薯と草茂雜て熟
と称ふ功力を農功ふ半ふ
ふ信ふふ生利四地地と擇ぶて生ふれを穀地に妨げ
時と計ふて稼ふ八農時と妨げ地ふ荒廢ふくして民
家ふ餘饒ふ生ふ利五地発生ふ者八邪食貪ふ饑饉して

腹を果し淹廻りを以て蘇を充て脾胃を補ひ童便を盛
し生藤蔓を搾汁を以て飲ませ生熟共に成く
食べ易く餅餌作るし團餅成製し皮を連ねて須臾造
粉を搗て蒸成調ふ脯を作て糧と資ち晒し干して
倉廩を積む而し味を梨栗に同しく功を稲粱に等しく
利を世豊年と為て計ふる膏腴乃上地毎畝穀子千枚收ふ
と五百觔を充し大麥小麥膏粱蕎麦の收穫大田者相
等し蕎麦則上地一畝約ふる萬餘觔下地と五六千觔
と收む碾臼を煩さず且糠粃なし利八也○農政全書
云著有十三勝農業全書を著す と譯して いふく一ふを

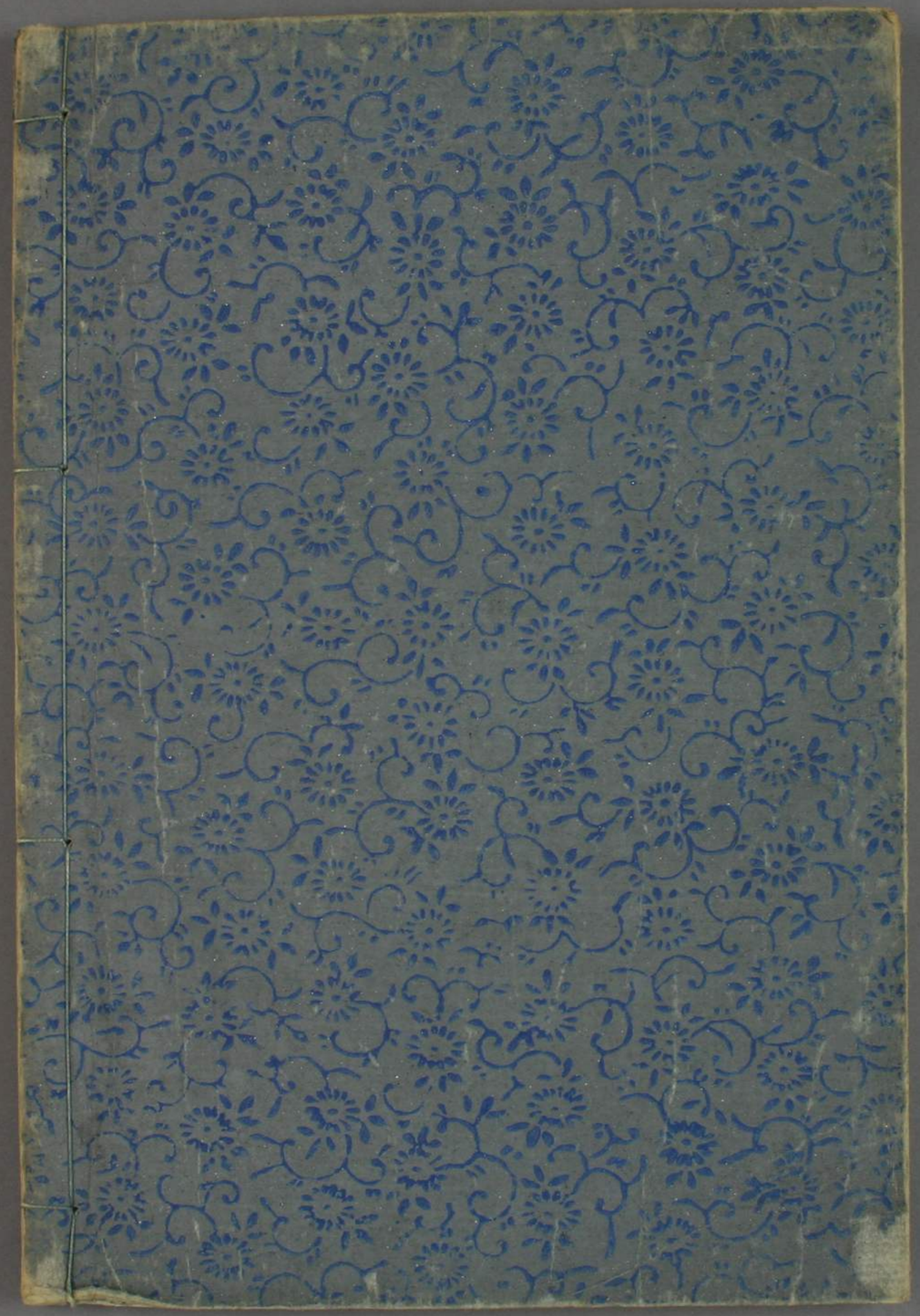
成形圖說卷之二十

二十七

繰り一畝だらの地より作り出す根四五十石を出す事
今西洲にて上地一畝十二三石を收穫する地力
の劣るに隨ひ他に比れハまた收納多し 二
ふを色白く味甘く諸の作物の中より是小豆を力賞
味稀ふ事ふを人の菓とふふふと山藥を同し四ふを
一加ふ乃豆を切分て種たつ事ハ来年に二三十町ぞ
ふ種子ぞを生ずるものを根を蔓を地より
節ふを根を生ず風雨ふを枝を蔓を地より
ふを食物を成ふと五穀を同しふふ作種成ふふり
七ふを淨く見おとふ形ふを成ふ物を用ふ或ふ童
物菓ふ等種ふを料理し又菓子ふふふふふ物ふり八

また酒を造るにはみな干て久しく貯へ置くなり
み粉まぜて餅のごとくする用ゐ法にて味よし十月に生ず
ゲンゼと蕨てと食ふにはゲンゼ十一月に採る物なり
根をとりまぜて紙作りこの苦蕨を多く早くとりて
まぜて人を留さのこ入れど十二月に入夏うるこのこと
じめ取る物にて枝葉極くさくんなるゆゑ他の
他物のおのく中うち蕨ふくとを多く入れば
味と好物なるべし十三月に根の蕨ふふ所に土の産
月の新ゆゑ出氣のそし他の他物を葉茎まで皆つくせ
ハいろ〳〵拵て生出せどてもと空しくなるべし

成形圖說卷之二十

ぶとと此藷を多く出葉球皆ちくてを頭くゑ生し
いう根の出ずるまと枝先をふるふるしを球藷の十三
勝ずく他の他物を多くかくれ出ずるしかい可

成形圖說卷之二十終